

「お客様は 神様です」



奈良県文化国際課国際交流員

Neil Broadley ニール・ブロードリー

JETプログラムでは「JET参加者の状況はさまざま」という基本原則があると言われています。確かに、奈良県五條市で勤務した一年間、そして奈良県庁で勤務した二年間は、仕事内容や住んでいる環境の面からも正反対と言えるでしょう。五條では、田園風景の中で多くの学校を訪問しました。一方、県庁では、少し都会的な環境の中で、デスクワークが主です。しかし、奈良県で国際交流員としての三年間に暮らす時期が近づいてきました。JET参加者の仕事内容はそれぞれ違いますが、一人ひとりが、日本の国際化の推進に取り組んでいるという大きな共通点があることが分かってきました。奈良県でのいろいろな体験を振り返ってみた結果、次のような結論ができました。

国際交流はサービス業です。

このことはJETプログラムの大事な一部ですが、奈良県で国際交流員として働くことにどうつながっているのかを説明したいと思います。

レストランに行くと「食事はいしくて手ごろな値段なんだけど、ウェーターの態度が悪いから二度と来ない」と思ったことがあります。ウエーターの仕事は快適な雰囲気をつくり、お客様の

ニーズに合わせたサービスを提供することです。外国語指導助手であるのが国際交流員であるのが、JET参加者一人ひとりの仕事も同じだと思います。外国語教育や国際交流イベントという「商品」を提供しますが、生徒やイベント参加者などの「お客様」にどのように提供するかということも、「商品」そのものと同じように重要です。JETプログラムによる「国際



↑海外招へい事業で西尾奈良副知事の通訳を務める

化の推進」は、市民に異文化に触れるチャンスを与えることだけではなく、異文化との触れ合いを楽しみ、それによって人間として少しでも成長することだと思っています。

「国際交流はサービス業」ということを念頭に置いて仕事を進めるようになったことで、私の仕事はさらに充実したものとなりました。奈良県は豊かな歴史と文化財に恵まれ、観光地として有名です。従って、通訳の仕事同様、奈良県を外国の人へPRする仕事も少なくありません。式典や来客訪問の際に通訳をするだけでなく、予定変更等の連絡を迅速に行い、異文化の中で行動することを助け、問題が起った場合には適切に対処するのが私の果たすべき責任であると考えます。訪れた人に適切な接客をすることで、奈良と日本の楽しい思い出をつくる手助けができればと思っています。

一般県民と接する場面でも同じように対応するようにしています。約四年前に、前任者は奈良県JET青年連絡協議会というJET参加者によって構成されている国際交流団体を創設しました。この団体は、県民との交流を目的に無料のイベントを企画しています。三〇〇人以上の方が参加するイベントもあり、参加者にもマスコミにも高く評価されています。その成功の理由は企画プロセスにあると思います。常に参加者を中心にイベントを

企画し、ためになるだけでなく、楽しく面白いものになるよう企画しています。「インターナショナル・フード・フェスティバル」に関するアンケートに、ある子どもはこう書いてくれました。「今日のフードフェスティバルは、たのしかったです。また、おいしいりょうりもおなかいっぱい食べれたし、言うことありません。世界のりょうりも食べられました。ふだん、食べてないものがたくさんあるので、はじめはこわごわ食べましたが、みんなが心をこめてつくってくれたことを、かんしゃします(原文)」。奈良県JET青年連絡協議会の会長として、このような感想を目にする



↑奈良県民のための国際交流事業「インターナショナル・フード・フェスティバル」で司会を務める

時、私は自分の仕事にやり甲斐を感じます。積極的な参加者なくしては、有意義なイベントはありません。

海外で生活したことのある人ならどんなでも賛成してくれると思いますが、異文化間の橋渡しをすることは、どのような状況であつてもたやすい仕事ではありません。言語能力と文化に関する知識は大事ですが、必要な道具の一部にすぎません。さらに忍耐、熱意、そして対象者のニーズを予想できる能力もサービス業界で必要不可欠なものではないでしょうか。私はJETプログラムによってこういった技能に自信を持つことができました。七月の任期満了時には、多くの大切な思い出とともに、奈良県で勤務した三年間を振り返るだろうと思います。



Neil Broadley

アメリカ・コネチカット州出身。2001年に1年間同志社大学に留学。2003年にオーバリン大学を卒業後、JETプログラムに参加。趣味は読書、旅行、コンピューターなど。将来は引き続き国際交流関係や翻訳・通訳の仕事を目指したい。

夢を現実に



熊本県立北稜高等学校外国語指導助手

Victoria Loudon ビクトリア・ラウドン

私が日本に到着したばかりの日(一年くらい前)、「私はここで一体何をしているのだろう?」と自分に問いかけました。日本に到着するまでの過程や動機がいまひとつはつきりしていなかった理由もあって、来日した直後はかなり困惑していました。二、三カ月前、神経科学の学士号を取得するまであと少しだったころ、次に何をするべきか途方に暮れていました。その時、JETプログラムのことを耳にしました。内容を聞いて、日本で働き生活するといった、この上ない素晴らしいチャンスに好奇心をそそられました。英語を教えるということは、私が今まで学んできたものとは随分違うものでした。しかし、違う国を旅し、新しい文化を学ぶことが大好きな私にとって、それは障害にはならず、ぜひこのチャンスをつかみたかったです。

日本は私が訪れたいと思っていた五つの国の一つでしたが、それと同時に、もっとも物価が高い国の一つでもありました。手元にお金など持っていない、卒業したばかりの貧乏学生だった私にとって、日本に来るのは夢のようなことでした。JETプログラムは私にとって、ただ訪れるだけではなく、その国で最長三年間まで暮らしながら、その国の素晴らしい文化を体験する機会を与えてくれました。現在、熊本県玉名市で外国語指導助手(ALT)として一年以上働いており、私は自分のやっている仕事が好きです。

私は、人、祭り、食べ物、季節、学校など、多くの理由で日本が好きです。これらのことについて全部書くのには、少なくとも一年はかかるでしょう。

ここでの生活はいつでもたやすいというわけではありませんでした。日本は私の生まれ故郷であるスコットランドとはいろいろな面で異なります。私は多くの国を訪れた経験がありますが、日本における文化の違いは、今まで訪れた国々で感じたものの10倍にも拡大して見えました。結果として、箸を使ったり、時間をきちんと守るようになったり、という小さなことから、言葉や振る舞いといった大きなことまで、私は多くのことに適応してきました。最初の二、三カ月は、一日でも早く日本の生活になじもうと頑張ったあまりに、数多くの失敗を重ねましたが(私の周りの人たちは、それを面白がっていたこととでしょ

う)、一年が経ち、今は日本での生活が様になってきたと思います。ここ日本での私の仕事は



↑北稜高校の英語クラブと

さまざまで、やりがいのあるものです。私は玉名市の北稜高校と南関町にある南関高校で教えています。この二つの学校は非常に異なっていますが、両方の生徒も先生方も大好きです。生徒はいつも私を温かく歓迎してくれており、私が到着した日から、私を穏やかな気持ちにさせてくれました。先生方はみんなとても親切で、私と一生懸命英語で話そうとし、私が日本語で話すことを勇気付けてくれます。私の仕事において最も楽しみなことの一つに、英語クラブがあります。北稜高校で、ブリティッシュ・カウンシル主催の、入賞者にはイギリス旅行のチャンスが与えられるというビデオコンクールに応募しました。応募した五人の生徒と私が相談し、台本を作り、装飾を作り、音楽を流し、ちよつとした踊りやフェイス・ペインティングを施しました。ビデオ作成には二週間しか時間がありませんでしたが、共に熱心に取り組み、締め切りに間に合わせました。そして、その努力は報われ、二週間後、私たちはコンクールで優勝したという電話を受け取ったのです。旅行は五人の生徒と先生が行きました。



彼女たちと一緒にいきたい気持ちはやまやまでしたが、結局一緒に行きませんでした。イギリスを訪れたいと強く願っていた先生にそのチャンスを譲ったのです。イギリスに行けるという私からの報告を耳にした彼女たちの顔を見たときに、また、イギリスから戻ってから彼女たちの話を聞いたときに、どのくらい私がワクワク・ドキドキしたかは言い表せません。それから、彼女たちは英語で話すとき、もっと自信を持つようになりました。私は彼女たちみんなを誇りに思っています。今、彼女たちは大学進学を目指しています。その中の生徒の一人は、最初持っていた将来の希望を大いに修正し、英語を使ってブリティッシュ・カウンシルで働きたいと思っています。ゆつくりと落ち着いてこのことを考えてみると、日本へ来るという夢を手にした私が、今度は逆に彼女たちの海外へ行くという夢を手伝うことができたことが、仮に私が日本にいたたった一つの理由であるとしても、私はそれで満足です。

私が日本に来たばかりの時、自分自身に「私はここで一体何をしているのだろう?」と問いかけたことを思い出します。もし、ビデオコンクールの結果が満足のいくものでなかったとしても、私がここにいる時間が価値のあるものだと思う理由はほかにいくつもあります。小さなことです。幼い子どもにとって私が初めて

会う外国人であつたり、ジムで友人とおしゃべりしたり、友人が英語で話す練習をするのを手助けしたりすることです。また、日本にしていることによって、多くのことを吸収しています。日本語を学び(ゆつくりではありますが)、全く違う文化を理解し、私は人間として毎日自分が成長していると感じています。日本を去るときはきつと寂しくなると思いますが、いつその日が来ても、私が経験したことのすべてをスコットランドへ持ち帰りたいと思います。この経験は一生私の心に残るでしょう。ここにいる機会を与えてくださったJETプログラムに感謝しています。



Victoria Loudon

イギリスのスコットランド中央にあるスターリングという小さなまちで生まれ育ち、神経科学の勉強をするためにグラスゴー大学へ入学。大学を卒業し、JET参加者として来日。日本へ来た理由は、日本という国や文化に魅力を感じていたことと、海外を旅行し、海外で生活したいという強い希望があったからである。趣味は、漢字学習や水泳、サイクリング、雑誌を読むこと。JETプログラムが終わった後、動物と財政の2つをつなぎ合わせたような職業を見つけたいと思っている。

Neil Broadley

functions, I make sure that our guests are kept informed of any schedule changes, help them navigate the Japanese cultural waters, and take responsibility for ensuring that any difficulties they experience are dealt with promptly. Through treating visitors like customers and taking care of them appropriately, I like to think that I am helping them return to their countries with fond memories of Nara and Japan.

Of course, I also apply this philosophy to my interaction with ordinary citizens as well. Approximately 4 years ago, my predecessors founded Nara JETNet, an organization run entirely by JETs that plans events for citizens of Nara Prefecture. The events, which can attract upwards of 300 participants, are free of charge and consistently receive praise from participants and media alike. One of the main reasons for our success is our planning process – we are consistently putting the participants first and thinking about how to make our events not just educational, but interesting and exciting as well. One child wrote on a

post-event survey, “Today’s food festival was fun. I ate lots of good food. Some of it I had never had a chance to try before, so it was a little scary, but everyone worked really hard to cook good food. Thank you very much!” As chairman of Nara JETNet, seeing statements like this gives me pride in the work I do. After all, what is an event without enthusiastic participants?

Serving as a cultural translator in any kind of setting is a very daunting task, as anyone who has lived abroad can testify. One needs a wide variety of tools, of which linguistic ability and intimate knowledge of both cultures are just the tip of the iceberg. Even more important are patience, dedication, and the ability to anticipate your guests’ needs; the same qualities that are essential for success in the service industry. The JET Programme has afforded me the opportunity to gain skill and confidence in this aspect of international relations, and when my term ends in July, I will be able to look on my time in Nara with many fond memories. 英語

Victoria Loudon

day I arrived. The teachers are all lovely and try very hard to speak English and encourage me to speak Japanese.

One of most enjoyable parts of my job is working with the English Clubs. At Hokuryo, we entered a video competition to win a trip to the UK with the British Council. The five students that entered and I put our heads together and made a script, decorations, background music, a little bit of dancing and face painting. We only had two weeks to make the video but we worked long, hard hours together to finish it in time for the deadline. The hard work paid off and 2 weeks later I received a phone call to say that we had won. The trip was for the 5 students and a teacher. I would have loved to go with them but it was not possible. I gave my position to another English teacher who was desperate to visit the UK. I cannot tell you what a thrill it gave me to see the faces of the students when I told them that they were going to the U.K. and the thrill it gave me to hear their stories when they returned. Since then, they have grown massively in confidence when speaking English. I

am so very proud of all of them. Now, they are applying for university. One of the girls has changed her initial career plans and wants to work with the British Council using her English. When I sit back and think about it, I am so happy I applied to come to Japan if for the sole reason that I helped these students live a dream - to go abroad.

When I arrived, I asked myself “What am I doing here?” If the video competition was not enough there are a hundred other reasons why I believe my time here is worthwhile. Small things, like being the first foreigner a small child sees or chatting with my friends at my local gym, helping them practice their English. I am also benefiting hugely from being here. I am learning Japanese (slowly), understanding a whole different culture and everyday I feel I am growing as a person. I will be sad to leave Japan but whenever that day comes I will take all of my experiences back to Scotland with me. This experience will stay with me for life. Thank you to the JET Programme for giving me the opportunity to be here. 英語

The Customer is Always Right

One of the axioms of the JET Programme is “Every Situation is Different.” Indeed, my two CIR positions – in Gojo City, Nara for 1 year and in the Nara Prefectural Office for 2 years – are practically polar opposites in terms of duties and living situation. The first involved many school visits in the countryside, while the second sees me doing office work in a more urban environment. As I enter the final 6 months of my three-year stint as a CIR in Nara, however, I have come to realize that despite often-cited differences in JET situations, we are all working towards the same goal: promoting internationalization in Japan. As such, my wide variety of experiences in Nara has lead me to the following conclusion:

International relations is a service industry.

I would like to explore this aspect of the JET experience and how it relates to being a CIR in Nara.

Have you ever been to a restaurant and thought, “The food is good and the price is right, but I don’t think I’ll ever come here again because the staff is rude”? A

waiter’s job is to make the customers comfortable and ensure that their needs are being met. The same goes for all JETs, whether ALTs or CIRs. While language teaching, international events, and the like – the “products” – are some of the services that we offer, just as important is the way that we present these services to our students and event participants – the “customers”. An important part of internationalization on the JET Programme is making sure that the local citizens are not only being exposed to a variety of world cultures, but also that they are enjoying themselves and walk away having grown a little bit more as people.

I have found that approaching my job with this “service industry” mindset has helped improve my job performance. As Nara is a prefecture that has a rich history and a number of important cultural properties, it is home to a booming tourism industry. Accordingly, I am often called upon to do not just interpretation, but also public relations for the prefecture. Rather than simply interpret at these official

Living a Dream

The day I arrived in Japan (just over a year ago) I thought to myself, “What am I doing here?” The whole process of getting here had been such a blur that when I finally made it, I was more than a little disorientated. A few months earlier, with my Neuroscience degree almost behind me, I was at a loss of what to do next. Then I heard about the JET Programme. After hearing all the information, I was intrigued by this amazing opportunity to work and live in Japan. Teaching English could not have been further from what I was trained for, but being a lover of travel and learning about new cultures I was not fazed by this and seized the opportunity with both hands. Japan was one of the top 5 countries I wanted to visit but it was also one of the most expensive. As a newly-graduated student with no funds behind me, visiting Japan was merely a dream. The JET Programme gave me the chance not just to visit but to live and experience the country and culture in all its glory for potentially 3 years. I have been an ALT in Tamana City, Kumamoto Prefecture for just over a year now and I love it.

I love Japan for a whole host of reasons; the people, the festivals, the food, the seasons, school, and so much more. I could write about all of these but it would take all year.

I have to admit living here has not always been easy. So much in Japan is very different to Scotland and although I have visited many countries, my cultural differences in Japan were magnified ten-fold when I moved here. As a result, I had a lot of adjustment to do; from minor things like using chopsticks and being punctual to major things like the language and behavior. I made many mistakes while trying to “fit-in” in my first few months (much to the amusement of every Japanese person around me) but I think, a year on, I have settled in quite nicely.

My work here in Japan is diverse and challenging. I teach at Hokuryo Senior High School in Tamana City and Nankan Senior High School in Nankan Town. The schools are very different but I love the students and teachers at each school equally. The students are always warm and welcoming towards me and made me feel at home from the